

井ノ口と秦野との関わり

尾尻八幡神社は、神奈川県神社庁によると創立年代は不詳でありますが、往時八幡宮と称え源頼朝のころの、延久年間(1069~1074)に現位置の鶴崎山に祭祀されていました。長い間、尾尻村・大竹村・井ノ口村字砂口の鎮守でありました。御神体は馬乗の像で本地三尊弥陀は鉄鏡に鑄出し、傍らには建保3年(1215)9月16日と記されています。鎌倉將軍の尊崇篤く、相模三鶴八幡のひとつとされ政子安産の祈願所とされたということです。徳川家康より、天正19年(1591)に社領三石五斗の朱印を受領しています。

明治政府指導の下、郡県制施行のため一村一社として、明治5年(1872)5月22日、議定書によれば大竹村、尾尻村総代等熟議の結果、大竹村全員が離脱し、尾尻八幡神社は尾尻村の総鎮守となりました。大竹村は新たに嶽神社の氏子として独立しました。明治6年、八幡神社と改称し、村社に列せられたとあります。その後砂口も分離し、砂口配水池に隣接の以前から天王さんとして尊崇されていきました現在の八坂神社と併合して祀られることとされました。

天王とは「牛頭天王」のことで、釈尊の僧坊「祇園精舎」の守り神、すなわち「厄除神」であり、京都東山区の八坂神社と同じです。この神葺きの小さな祠は現在も神社内に保存されています。

上井ノ口地区は明治以前まで水源がなく人口も少なく、それ以後は他地区からの移住者がだんだん増えてきましたが、当時は単独では神社を持つことが困難であり、砂口と合同で一社を構えていました。明治45年頃までは、祭礼の日に担がれた神輿は村境で上井ノ口地区に引き継ぐ方法をとっていました。当時ありました大人神輿は破損し、現在彫刻部分のみが保存されています。

昭和12年5月15日の社殿改築と昭和56年の大修理には、上井ノ口(宮



八坂神社

向・宮前・宮上・宮原)の大勢の方が氏子として寄付をいただいた記録があり、石碑に刻まれています。宮原地区は、以前は遠藤原への登り口まで砂口分でありました。砂口だけや各々単独では神社の維持が難しかったため、現在では共同で護持に至っています。

砂口の北西に「池窪」と呼ばれる窪地があります。砂口から今泉、小原へ抜ける道は「池窪」(正確には境と秦野市との境界)を通ります。この横の斜面が四町八反という所で、松林になっていました。大雨や長雨の後で、数日経つと湧水が低地の畑に広さが5町(5ヘクタール)ある池をつくり、作物は水の底になってしまいました。澄んだ水の表面に四方の景色が逆さに映り、その美しさは見事なものでした。夏場ともなると、若者たちがここで水泳をし、底の柔らかな泥に足を取られて亡くなった人があったため、天明2年(1782)に万霊供養のため建立されたのが「池窪の大悲観音」です。南が丘に団地ができて雨水が染み込まなくなったためか、近年、池窪に水が溜まることはありませんが、現在砂口に住む60代の人は、深いところでは1メートルあり、小学生のころ泳いだという話を伺いました。

台座下の塔に「萬霊塔 天明2年秋8月吉祥日」右には「相州中郡今泉村大岳院現在大量本海」、左に「上郡井野口村願主空月」と記してあります。上に坐す観音様は何者かに盗まれてしまったため昭和46年の再建で、坐高63センチメートル、台座は五段に積み重ねられ蓮華座以下113センチメートルです。後に、いつのころからか、これが安産や子育ての仏様と言われるようになり、今でもお参りに来られた人が奉納した赤いよだれかけが、その首にかけられていたりしています。



池窪の大悲観音